



始めるなら、今！



記事内容はわたし個人の見解であり、すべての方への有効性は保証できません。

ご意見などの宛先 horikawassw@gmail.com

百年以上むかし、ジャーネーという学者さんが、たとえば7歳の子は一日を、35歳のあなたの5日分に長く感じていると言っています。

今回はこのことを基に書いています。

☆1

子どもは家と園・学校以外の世界を持ちません。週末のお休みも含めて、おとなが決めたことに従って体験を重ねるだけです。

ある一日の経験が、その子の人生初の経験で、重大な意味を持つかもしれません。

経験が毎日の繰り返しであれば、その子の生涯でずっと続いていることになり、一部は強烈な記憶として残ることでしょう。

★2

だからこそ子どもは、いつもとは違う体験をととても喜び、覚えていくのでしょう。

先日の運動会は、お母さんや先生の生涯では「何回かの中の一回」かもしれないけれど、子どもにとっては「特別な一回」だったのです。忘れてしまうことがほとんどでしょうけれど、印象の強さによっては生涯覚えていることでしょう。

☆3



子どもはほぼ、自分のことだけしか考えることができません。**客観的に**など考えることができないのが子どもです。

お母さんや先生方はその子のこと、ほかの家族(児童)のこと、ご自分の仕事のことなどたくさんのことについて考えながら一日を送っています。

だけど子どもは、そのことに考えが至りませんから、特別扱いして欲しいと思って、お母さんや先生を独り占めしようとあの手この手を使ってきます。

★4

そんな中のおひとり、子どもが望むように相手をしてあげるとその子は、おとな皆にそうされることを期待していろいろ仕掛け、拒まれるとその人を対象から外します。

子どもの社会性、人格は、このような駆け引きの繰り返しで成長して行きます。おとなにとっては何回ものの中の一回かもしれないけれど、子どもはそれがすべてだと思ってしまうことがあるようです。

これくらいは良いだろうと、子どもへの対応を軽んじることが、思わぬ事態につながることもありそうです。